

崇校だより

横浜市情報ネットワーク（ＹＹネット）上に本校のホームページがあります。

URL : <https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/tookaichiba/>

横浜市立十日市場小学校
令和6年2月29日（木）
緑区十日市場町1392番地-1

電話：981-0420

FAX：983-1694

「お釈迦様の指」

校長 平田 あや

どこからか梅の香りが漂いはじめ、厳しい寒さも終わりを告げようとしています。桜の木も芽が出始め、花を咲かせる準備をしています。学校も3月を迎え、一年間のまとめの季節となりました。

子どもたちだけでなく、我々教職員も、今年度一年間の教育活動について振り返りを行います。子どもたちに必要な資質・能力が身に付いたのか、教職員は必要な手立てや支援を適切に行うことができたのか、次年度に向けての改善案などを職員会議にて協議します。その中で、ふと「よい教師とは」と考えさせられる場面があり、昔読んだ本―「教えるということ」（大村はま著）の一節を思い出しました。本の中のお話「お釈迦様の指」を紹介します。

あるとき、お釈迦様が天上から人間の世界を見ていました。男の荷車が、ぬかるみにはまって動かなくなっている。誰も助けに来てくれない。自分でやるしかない、その男が渾身の力を込めて荷車を引いたとき、お釈迦様が見えない指でポンと押して助けてあげる。でも、お釈迦様は「私が押した」とは言いません。困ったときに助けてくれると思わせるといけないからです。

著者の大村先生は、「もしその仏様のお力によってその車がひき抜けたことを男が知ったら、男は仏様にひざまずいて感謝したでしょう。けれども、それでは男の一人で生きていく力、生きぬく力は、何分の一かに減っただろう。」と述べています。「自分の力でやり抜けた喜び」をかみしめたからこそ、人はまた窮地に立ったとしても、その局面を打開するために力をふりしぼって生きていこうと努めるのでしょう。

この話に登場するお釈迦様は、子どもの学びを見守り、子ども自身が支援されていることに気付かないくらい、適切に支援をする教師の姿につながるように感じます。自分の力で成長したと子どもに思わせる教師が、本当の「教え上手」なのでしょう。時が経ち、いつかその子が、自分が成長できたのは教師の「お釈迦様の指」があったからだとわかる―それが教育の本質だという気がします。

この話を知った時、小さいころ、自転車の補助輪を初めて外して乗ったときのことを思い出しました。私の父が、後ろから自転車を支えてくれていました。支えてくれているものだと思って、自転車のペダルをこいでいたとき、後ろを見てみると、支えている手がなく、知らぬ間に一人で自転車に乗れるようになっていました。

我々教職員も、この「お釈迦様の指」を目指して、研鑽を積んでいかななくてはなりません。そのためには、子どもは、必要な支援や環境があれば、必ず自分の力で伸びていくのだと信じる気持ちをもつことも大切だと思います。

令和5年度も、いよいよ残りわずかです。3月19日には6年生が卒業を迎え、そのほかの学年は25日が修了式となります。引き続き御理解と御協力をどうぞよろしくお願いいたします。